

「ポストモダンの現代人に到達できる福音とは」

2016年度 第一回大野キリスト教会 教育セミナー

2016年5月22日(日)午後1時～3時、小礼拝堂

今年度の教育セミナーの講師にお招きいただき、大変光栄に思っております。今回の講演のテーマは、「ポストモダンの現代人に到達できる福音とは」とさせていただきます。まず、このようなテーマを選んだ背景から説明させていただきます。私は、今回のセミナーのチラシに次のような「お招き」の文章を掲載させていただきました。

今年私は、大野教会の牧師に就任して50年目を迎えています。この50年間私は、福音派という「ギルドの体質に満ちたゲットー化された村社会」で生きてきました。そういう私にとって、日本は想像以上にとてつもない巨大な国家で、あらゆる善と悪を同時に飲み尽くしてしまう、得体のしれない、とても太刀打ちのできない「泥沼のような社会」です。

しかし、そのように言っているだけでは済まされません。ポストモダン社会に生きる現代日本人が飛びつきたくなくなるような「新しい福音理解」を提示し、日本社会に真正面から戦いを挑んでいく責任を感じています。

この新しい福音理解には、クリスチャンのストーリーから生じるオープンな神、被造物管理権の回復を中心としたキリストの贖い、今の世界の延長線上に期待すべき新天新地、人間の深層に迫るリバイバル的な聖霊の働きなどが含まれます。

今回の春の教育セミナーでは、このような「聖書的な福音理解」を教会の皆様にお伝えしたいと思っています。

私は、大野教会のすべての方々にこの講義を聞いていただきたいと願っております。教会にとって一番大切なことは、その教会に集う人々が日々どのような人間としてこの社会でその歩みをおくっておられるのかということにあります。私は、今という時代の中で、教会の皆さんが「超一流の人間」になっていただき、ご自分の使命遂行に励んでいただきたいと思っています。超一流の人間とは、自分に与えられた賜物のすべてを活かし、思い残すことなく自分に与えられた使命を遂行して自分の人生を全うすることです。

では、ご挨拶はこのぐらいとし、まず「ポストモダン社会」とはどのような社会なのかを説明するところから始めさせていただきます。

今日までの西欧の歴史は、キリスト教を中心に形成されてきたといってもよいでしょう。それは、中世のカトリック世界(10から15世紀ぐらいまで)を基盤に、宗教改革時代のプロテスタント正統主義が浸透した頃(16世紀から17世紀まで)や近世の啓蒙主義運動の影響を受けた自由主義キリスト教の時代(18世紀から19世紀前半)を経て、聖書批評学と新正統主義神学と、それらに反動化した根本主義神学(これにはディスペンセーション主義のグループと聖書の無誤性を標榜するグループと、聖霊の特殊な働きを強調するカリスマ派のグループがある)に立つ人々という二極化した時代(19世紀後半から20世紀前半)を迎えました。

しかし、20世紀後半から21世紀にかけ、聖書批評学、新正統主義神学、根本主義運動、カリスマ運動のいずれもが行き詰まりを覚えるようになりました。一方カトリックは、第二バチカン公会議を通して大きな変容を遂げます。そして、20世紀初頭に盛んだった根本主義運動から、学問や文化を評価するグループが「新福音主義」として出てき、いわゆる「福音派」と言われるグループを結成します。

キリスト教世界は以上のような推移をたどるのですが、20世紀のはじめから半ばまでは、近代合理主義思想(理性によって合理的に判断できるものが真理であるとする考え方)の支配下にありました。その結果、政治的・軍事的・経済的・民

族的・文化的な領域において、さまざまな問題や軋轢が生じ、列強国家による弱小国家の植民地的支配、共産主義国家や独裁国家の出現、ナチズムや反帝国主義の台頭などを許し、第一次、第二次世界大戦が勃発するという悲劇に見舞われました。

そのような苦い経験を経て、20世紀の後半になると、経済至上主義の国際社会になり、グローバル化が進みました。そういう中で、文明や宗教の衝突が顕著になり、地域紛争、格差社会やテロがますます横行する社会となりました。世界全体を見れば、今なお民主主義国家が理想・目標とされていますが、未開発国家の中には必ずしもそうとは言い切れない状況があります。異文化、異文明、異宗教の対立は一層の激しさを増し、複雑怪奇な社会が誕生しています。

このようなポストモダンの風潮の西欧資本主義社会では、文化的・社会的・政治的な領域では絶対主義ではなく相対主義が、宗教的には唯一主義ではなく多元主義が、倫理の世界では普遍主義ではなく状況主義が社会を覆っています。学問の世界でさえ(特に人文科学や社会科学の分野においては)、永遠の真理など存在せず、「私にとってどういう意味があるのか」、「自分が納得できるのかそうではないのか」ということが、最も重要になっています。

このような時代思潮は、キリスト教に対しても厳しい批判の矢を向けました。特に21世紀に入ると、新無神論運動が活発になりました。アメリカではサム・ハリスの『信仰の終焉』(2004年)、ダニエル・デネットの『解明される宗教』(2006年)、イギリスではリチャード・ドーキンズの『神は妄想である』(2006年)、故クリストファ・ヒッチンスの『神は偉大ではない』(2007年)などの書物が次々と出版されました。この4人は、「新無神論の4大騎士」としてマスコミを賑わせた人物です(悲しいことに、この運動の多くの人々が福音派の教会で育った人たちです)。ただし、アメリカやイギリスで起こったこの種の運動は、日本人にとっては常識的なもので、驚くようなものではありません。しかし、日本の福音派においても、未だ「創造6000年説」や「レフトビハインド説(イエスの再臨のときにクリスチャンが空中携挙されるため、地上が大混乱に陥るといふ考え)」がまことしやかに語られていますので、笑い飛ばすわけにもいきません。

では、このような時代思潮の流れの中で、福音派のキリスト者は、どのように福音を理解し、その福音を宣教していったらよいのでしょうか。欧米の福音派の聖書学者や神学者たちは、ポストモダンの風潮を敏感に察知し、その批判に応える努力をし続けています(例えば、バイオロゴスの活動)。それは、「福音の再発見運動」に通じるものです。私は、その特色の主なものを4つだけ紹介しておきたいと思います。これらは、福音派の福音理解の弱点を乗り越えるため発見されたものです。一瞬引いてしまうところもあるかもしれませんが、恐れず大胆に一步を踏み出していただければと思います。今から20年後は、日本の福音派においても当たり前前の神学になっていくでしょうから。

第一は、聖書をストーリーと見る見方です。

ポストモダンの時代において一番問題になるのは、キリスト教の正典である聖書をどのような書物と見なすのかという点です。これまでの福音派の聖書理解は、「聖書は神が啓示された命題的な真理がたくさん詰まっている書物」というものでした。それゆえ、聖書からキリスト教教理を導き出し体系化して、これこそキリスト教信仰の中身として提示してきました。

しかし、聖書批評学が行き詰まり、(バルト神学などの)キリスト教神学が膠着化するに及んで、新しい聖書理解の模索が始まりました。その結果、1980年頃から「聖書全体を物語として」理解するように変化してきます。聖書は、キリスト教教理の教科書や信仰のルールブック、霊性を養うためのデボーションナルな書物ではなく、科学や歴史の教科書でもありません。「神が人類と共に神の国を確立するためのストーリーが描かれている」と見なされるようになったのです。

この事実を現代のポストモダンの人々に最も巧みに説き明かした聖書学者は、NTライトです。私は、ライトを尊敬し、たくさんのことを学びました。といっても、ライトの信奉者でも、研究者でも、ファンでもありません。すべてのクリスチャンは、「自分の神学」をもつことが大切です。ライトの神学の優れたところを学び、自分の生活環境の中で、自らの使命を果たすのに間に合う「自分らしい神学」を発展させていただきたいのです。

「聖書を物語として理解する」とき、「narrative」と「story」と「meta-story(メタ・ストーリー)」の3つを区別すると分かりやすいでしょう。「narrative(物語)」とは、聖書中に出てくるアブラハム物語、出エジプト物語、ダビデで物語等々のことです。「story(ストーリー)」とは、私のストーリーとか、あなたのストーリー、神のストーリーなどという使われ方がされます。それは、自らが経験したことや出来事を話すことです(これは、信仰体験談とか証に近い意味です)。それに対し「meta-story(メタ・ストーリー)」は、聖書の中で神が本来語ろうとしているメッセージのことです。それは、旧新約聖書全体を流れている「神の贖いの物語」、「神の国の福音そのもの」を指しているといってもよいでしょう。あるいは、「創造、墮落、イスラエル、イエス、教会」の5幕に別れて展開される「聖書のドラマ」といってもよいでしょう。

第二は、キリスト者ととも神の国を作り続けている「オープンな神」への信頼です。

聖書を「命題的な真理が啓示されている書物」と理解するのと、「神の贖いのストーリーが描かれている書物」と見なすのでは、多くの点で違ってきます。例えば、「神がどのような方であるか」という問いに答えようとする、前者では、神について言及されている聖書箇所を寄せ集めて答えようとする。しかし後者では、現実に生きている歩みの中で神を体験し、その神体験をストーリーとして語るようになります。

最近、アメリカの神学者の間では「オープンセイズム」という問題が話題になっています(その代表者として、グレゴリー・ボイドを挙げることができます)。聖書の神は、未来のことをどの程度まで決めておられるのかという問題を扱っているのです。例えば、神は、ノアの時代の人々が悪い行いばかりをしているのを見て、「地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛められた」とか、人や家畜やはうものあるいは空の鳥などを造ったことを「残念に思う」と述べています(創世 6:6-7)。アブラハムが神の命令に従ってイサクを殺そうとしたとき、神は「今、わたしは、あなたが神を恐れることがよくわかった」と語られました。「今、わかった」と言われる以上、それまでは分かっていたのかと疑問が湧いてきます。ヨナは、タルシシュに逃れた理由を、神が「情け深くあわれみ深い神であり、怒るのにおそく、恵み豊かであり、わざわいを思い直されることを知っていたから」だと、告白しています(ヨナ 4:2)。エレミヤも同様に、神はイスラエルの対応次第でご計画を「思い直される」方だと語っています(エレミヤ 18:7-10、26:13 など参照)。

このような聖書の言明と、次のような聖句とは矛盾するでしょうか? 「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています」(ローマ 8:28)とか、「だれが神のご計画に逆らうことができますでしょう」(ローマ 9:19)、「みこころによりご計画のままをみな行なう方の目的に従って、私たちはあらかじめこのように定められていたのです」(エペソ 1:11)、「神は約束の相続者たちに、ご計画の変わらないことをさらにはっきり示そうと思い、誓いをもって保証されたのです」(ヘブル 6:17)などの聖句と。

もしこのような問題を従来の神学で解決しようとする、神の予定と人間の自由意志という問題設定になります。すると、「永遠に答えが出ない神学論争」に巻き込まれることになります。しかし、聖書を「神と神の民とが協力して神の国を拡張していくストーリー」が記されていると理解すれば、神が人の対応次第で計画を変えられることは当然のことになります。

第三は、キリストの贖いは人間の被造物管理権を回復させることにあったということです。

聖書を神のストーリーとして受け止めるなら、神概念に変化が生じるだけではありません。(自分を含めた)人間に対する理解、この世界に対する理解、キリストの贖いに対する理解、未来の希望に対する理解なども、大きく変わってくるはずです。

特に、キリストの贖いは「死んだら罪が赦され、天国に行くことができる」という内容から、「墮落によって損なわれた『神のかたち』が人間に回復され、人間が本来自分に与えられていた被造物管理の使命を全うできる者になった」(ヘブル 2 章)という理解に変化します。それは、クリスチャンの歩みを根底から変えてしまうものです。キリストの贖いによってクリスチャン

が「神の子にされる」ということは、「神の相続人になる」ということです(ローマ 8:17)。それは、クリスチャンが「王」であり「祭司」として、この世界を治めることを意味します(I ペテロ 2:9、黙示録 1:6 など参照)。

この問題については、私は、これまでの教会の教育セミナーで繰り返しお話をしてきました。従って、ここではこれ以上深入りすることは避けたいと思います。ただ、大野教会の皆さんは、本当にこの「キリストの贖い」に関する理解を確信し、被造物管理の使命に生きていただきたいと思います。ぜひ、深くご自分の歩みを振り返ってみてください。

第四は、私たち約束されている「神の国」に関する新しい理解です。

従来の福音派の救いの理解は、「イエスを信じるなら、死んだら天国に行くことができる」というものでした。もし福音をそのように理解すると、この世は神によって裁かれ、燃え尽きてしまうもので、クリスチャンがこの地上に生きている意味は殆どなくなってしまいます。罪を犯す前に、早く天国に行った方がよいという話になってしまいます。その裏側には、信じなかったら地獄行である、という話がセットとして出てきます。天国がすばらしいところであり、どうしても行きたいという気持ちを起こさせたいので、結果として「地獄の恐ろしさ」を強調することになります。「永遠に燃える火の池」というイメージは、「すべてを燃え尽きさせ、滅ぼしてしまうこと」を意味します。それを「永遠に苦しむ」というイメージに塗替え、恐怖心を植え付けるのは聖書的とはいえません。こういう考えは、異教的な背景から生じたものです。

もし福音がこのようなものだとなれば、ほとんどの人にとっては、福音はグッドニュースではなく、バッドニュースとなってしまいます。日本人のほとんどの人はイエス・キリストを信じないで生涯を終わってしまうのですから。

では、聖書が教えている「新しい天と新しい地」とは、どのようなものでしょうか。それについては、聖書はほとんど説明をしていません。今の世界の経験と言葉では間に合わない、想像もできないすばらしい世界でしょう。コリント人への手紙第一 15 章には、キリストの復活が証しされ、やがての日にクリスチャンもまた復活のからだに預かることが明らかにされています。キリストが地上で受肉されたお体とキリストの復活のお体との間には、連続性と非連続性の両方がありました。人間の復活のからだについても同じことが言えるのでしょう。イギリスの物理学者ポーキングホーンは、復活のからだをコンピュータのハードに例え、私たち自身のことを real me と捉え、ソフトに例えて説明しています。おそらく、神の記憶の中に私たちの DNA が存在し、それが私のソフトを構成しているのでしょう。

「私たちは死んだら天国に登って行く」と考えています。しかし、聖書は「天国は地に降りてくるものだ」と教えています。黙示録 21 章 2 節及び 10 節は、天のエルサレムが地に降りて来ることが明らかにされています。エペソ 1 章 10 節は、「時がついに満ちて、実現します。いっさいのものがキリストにあって、天にあるもの地にあるものがこの方において、一つに集められるのです」と述べています。むろん、新しい天と地については、現在の聖書にはっきり教えられているわけではありません。全く違うストーリーが始まるのでしょう。重要なことは、今のこの世界の延長線上にあるということです。

この世界は、元々よいものとして造られました(創世記 1:31)。神と人との共同統治という点では、この地上に問題が生じましたが、ローマ 8 章 20-23 節は、被造物のすべてが贖われることを告げています。この地球が何らかのかたちで残ることは間違いないでしょう。

最後に、ポストモダンの現代人に福音を効果的に届けるには、「ユダヤ人にはユダヤ人に、ギリシャ人にはギリシャ人に」(I コリント 9:19-23) という原則で働きかけることが大切です。人は時代思潮や文化的背景を一日にして変えるわけではありません。自然科学の研究をしている人々は理性中心の合理主義の中に生きていますし、芸術を専攻している人にとってはポストモダンの考えは当たり前のことです。近代合理主義の人には近代合理主義で、ポストモダンの人にはポストモダンの枠組みで福音を届けることが重要なのです。